



蝉時雨前の初夏

まだ夏も始まろうとしている時、死んでる蝉が居た。

彼は他の皆より早くに生まれ、皆より早くに死んだのだ。

それが幸か不幸かは僕には無論、誰にも判らない。

暑くてジメジメと湿った地中から彼は他の誰よりも早くに地上へと出た。

彼は地中に居る頃から皆より早く地上へ出たいと言う想いでいっぱいだった。

誰よりも早くに地上へ出て、青い大空を我が物顔で羽ばたきたい。1番立派な樹の幹にとまり、夏の唄を誰よりも上手に歌い上げ、そして産まれたばかりの可愛いメス蝉と残りの夏を添い遂げたい。そう思っていたのだ。大した高望みをした覚えはない。寧ろ蝉としては誰もが思う事を素直に想像していたのだ。

彼の願いは意図も簡単に叶った、だがしかし現実は違った。

何が違ったかと言うと、皆はまだ早いまだ早いと辛抱する中、彼はグズグズと明けない梅雨の合間に苛立ちながらも出て来てしまったのだ。

彼は外に出てみて、ああコレはまだ早いと自分でも思ったのだが、後戻りはしなかったのだ。

後戻りをすると言う事は「まだ早いまだ早い」と言っている皆の言う事に賛同した事になるし、何よりも誰よりも早くに脱皮したいと言う思いと、小さなプライドが彼を前進させたのだ。

その甲斐在って彼は他の誰よりも早くに大空に羽ばたいたし、我が物顔で一番大きくて立派な樹の幹にとまって夏の唄を誰よりも早くに歌った。

しかし、誰も居ない大空にこだまする事はなく、空は彼の願いの半分が叶った頃、彼の唄った歌の採点でもするかの様にシトシトと雨を降らせ始めた。とうとう雨は2週間止む事無く降り続け、彼は死んだ。

彼が死んだ後は驚く程にカラッと晴れ渡り、我先にと言わんがばかりに地中から他の皆が次々と出てきては、大空に羽ばたいた。

長く待った甲斐があったのか、皆が皆楽しそうに恋をする。

そんな死んだ彼の亡骸の元に一匹のメス蝉が佇んでいた。

地中の中でも彼女には彼の歌声が届いており、彼女はまだ見ぬ彼の姿に恋をしていたのだ。誰よりも早くに地上へ出て行った勇敢な彼に。その彼の亡骸の元で彼女はどれだけ佇んでいただろう。やがて空から真っ黒い影が彼女の前に舞い降りた。

彼女は彼の亡骸を必死に庇おうと、生命の危機が迫っているにも関わらず頑なに傍を離れようとはしなかった。真っ黒い影は彼女を啄むと何事も無かった様に飛び立った。

真っ黒い影が飛び立った場所にまたポツンと彼の亡骸だけが取り残された。

初夏の陽射しと皆の鳴き声が燦々と降り注ぐのに、ソレは彼や彼女の為に歌われるレクイエムではなく、自分の為に歌う恋の唄でしかなかった